

学生のフィットネスクラブに対するイメージの表示 —質的研究法の実践の一環として—

福島三穂子（コミュニケーション研究室）

権賢貞（筑波大学非常勤講師）

1. はじめに

本稿は、あるフィットネスクラブの若者会員を増やすプロジェクト(ふいっちゃんプロジェクト)において、様々な調査研究法の実践の一環として、質的分析の一部を研究ノートとして掲載するものである。調査を行いながら音声データやビデオデータを収集し、質的分析の勉強として、いくつかのデータをゼミ生とトランスクリプトに書き起こした。それらのデータを使って、データセッションを重ねた内容を記録したものである。プロジェクトの内容に関しては、調査実践報告「学生と企業をつなぐ社会調査の実践報告」として本紀要の実践・研究活動区分で報告している。

2. データ

当該プロジェクトで収集したデータは、多数あるが、ここで扱うのは、2020年10月23日に行われたディスカッションのビデオ録画である。2020年度後期に、フィットネスクラブのプロジェクトを、合同ゼミ（谷田貝ゼミと福島ゼミ）において実施することが決まり、顔合わせを兼ね、学生6名（4年生1名、3年生1名、2年生4名）がフィットネスクラブに関わる内容で、ディスカッションしたものである。

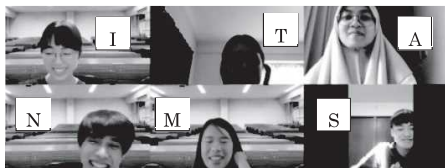


図1 学生ディスカッションの様子

調査地であるフィットネスクラブを体験する前にフィットネスクラブに対するイメージについて、

自分たちの生活を振り返りつつ zoom 上でディスカッションして貰ったもので、録画機能を使って録画した約 70 分のビデオデータを会話分析の手法を用いてトランスクリプトにしている。

3. フィットネスクラブに対するイメージ

3.1 トピックの推移

このディスカッションは、教員からディスカッションリーダー的役割を任された学生が「今回のプロジェクトがなんか若い人を、フィットネスクラブに引き込みたいっていう狙いだと思うんですけど今回、ええっと普通の、普段の生活の話からディスカッションしていきたいということだったのでええっと、ま、皆さんが一日をどうやって過ごすか、っていうところから話していけたらな、と思います」という発話から始まる。約70分のディスカッションを荒いトランスクリプトにすると600行になったが、おおよそのトピックの推移は以下の通りである。

行数 ディスカッショントピック

1-67: 大学の授業

68-89: バイト

90-113: 食事

114-165: 帰省・出身地

166-248: サークル

249-350: フィットネスクラブ・お出かけ

351-473: ゲーム

474-532: 友達・運動・トレーニング

533-600: 飲み会・ゼミ

参加者の6名は、フィットネスクラブのプロジ

ェクトに関わるディスカッションであることは知っているが、自分たちの生活を振り返る過程で、フィットネスクラブに直結する話題はなかなか出てこない。初対面の学生や2年生から4年生までいる先輩後輩の関係性がある中で、お互いに共通項を探し、ディスカッションの活発化につなげようとする試みが見られる。雑駁ではあるものの、このトピックの推移を見ても、学生の生活の話題にフィットネスクラブは上手く組み込まれていないようだ。学生をフィットネスクラブに引き込もうとした場合には、まず初めのハードルとして、フィットネスクラブそのものに馴染みがないことがあげられると思われる。

3.2 ことばの選択

フィットネスクラブにまつわることばについて、約70分のディスカッションの中で、どんなことばが使われていたか調べてみると、「フィットネスクラブ」と明言しているのは7回、「ジム」への言及は7回、「運動」ということばは14回使われていた。ここから伺えるのは、「フィットネスクラブ」ということばは彼らの日常語ではないだろうということだ。また、次に示す断片(断片1)にあるように、Sはフィットネスクラブと言わず「フィットネスの」(254行目)や「あのあんな感じのところ」(256行目)と表現しており、それを直後の258行目でMが「ジム」とことばを変えていることがわかる。一方で「フィットネスジム」ということばも使われていた。このように、「フィットネスクラブ」ということばがディスカッションの参加者たちの中で一定しないこと自体が、彼らの発話にぎこちなさを付与しているように観察できる。また、ことばの選択からも「フィットネスクラブ」は彼らの日常に身近な存在ではないことが伺える。

3.3 経験の語られ方と距離の作られ方

エスノメソドロジーや会話分析の手法は、先入観を持たずにデータと向き合うことが重要であり、

これらの手法を使う上で一番難しい部分であるかもしれない。同様にプロジェクトを実施する際も、偏見を捨て課題に取り組むことが大切であるが、何が偏見になっているのかに気づくこと自体が難しい。例えば、本プロジェクトでは、若者会員を増やすことを目的としているが、当初学生は自動的に若者カテゴリーに入っていた。しかし、調査を進めるにつれ、そもそもここで問題となっている「若者は誰なのか?」という疑問が出てきた。我々は、「若者」ということばが持つ偏見に自分たちの思考を縛られプロジェクトを遂行する上で必要な想像力を欠いていたことに気付かされたのだ。全ての人が共有している全ての文脈で同じように理解される「若者」という概念は存在しない。忘れてはいけないのは、“it is the range of contingencies, as interpreted by the actor, which may influence the actual outcome of a chain or sequence of action” (Heritage 1984: 111)であり、社会の成員はその場その場の判断を常に行なっているということである。

このことを念頭に、ここでは学生のディスカッションを質的研究法の1つである会話分析の手法を使って、フィットネスクラブについて話している部分の会話の断片を分析していく。若者カテゴリーに入っているとされた学生たち自身は、フィットネスクラブに対してどのようなイメージを持っているのかを明らかにしたい。そこからは、単純に学生は若いので若者として扱い、若者視点での解決策を提案して貰うというアプローチに対する危うさが見えてきた。

以下で示す断片(断片1)の直前には、コロナ禍の影響で、授業がオンラインになったり、サークル活動や県外移動が制限されたりしているものの、外に出かけられないことや、身体を動かさないことに不自由は感じていないことなどが話されていた。オンラインになってサークル活動もむしろ便利になったという意見が出た後で、笑いと7秒の沈黙があり、その後でMが始めた会話であ

る。1行目の「スポーツとかするような人は、あんまりいないんですかね、比率的に」という発話から、フィットネスクラブに話題を持っていこうとしている様子が見える。

[断片1]

246. M: この、ここのグループの人って、そんなにそのスポーツとかするような人は、あんまりいないんですかね、比率的に
247. T: みんな
248. M: Sくんはその、あれは軟式野球の(0.5) サークル入ってるから、するのかな
249. (1.0)
250. S: でも、入ってるけど
251. M: うんうん
252. S: 今回の
253. M: うん
254. S: 話にもある何かフィットネスの
255. M: うんうん
256. S: あのあんな感じのところには行ったことはないから
257. S: [どんどこかかっていうのはやっぱ
258. M: [そういうジムとかには
259. M: うん
260. T: うんうんうん
261. S: には行ったことないから
262. M: うんうんうんうん、なるほど
263. (2.0)

246行目の「この、ここのグループの人って、そんなにそのスポーツとかするような人は、あんまりいないんですかね、比率的に」という質問は、直前の文脈として自分たちはスポーツに縁がないという話が出ており、「スポーツとかするようは人はいない」という可能性に志向しているように見える (Heritage and Raymond 2021)。まず、「ここのグループの人」と限定することで、前述の内容(コロナ禍で外出が制限されても不便を感じない“家派”であると言った内容)を前提とした発話であることを示した後で、「そんなに～いない」という表現を使っているため、回答としては否定形が予期される。また、「いないんですかね」という付加疑問文の質問形式は、例えば「いるんですかね?」という質問と比較すると、いないという回

答に志向している質問デザインになっている。

この「いないんですかね」という質問は、文法的にもイントネーション的にも完了されているが、ここまでで回答はなく、Mは「比率的に」と加えることで、ターンを延ばし、誰かが回答できる新たな機会を作っている。Tが発話を始めるが、その発話の途中にMは、Sに対し新たな質問をする。しかし指名を受けたSは、すぐに発話を開始せず1秒の間が空いた後に、「でも」という逆接を表す接続表現を用いてターンを始める。ここで注目したいのは、248行目でスポーツをする人というカテゴリーに入れられそうになったSによる、フィットネスクラブには行ったことがないという主張のされ方である。246行目でMが「この、ここのグループの人って、スポーツとかするような人は、あんまりいないんですかね、比率的に」と前述のとおり、受け手を指定しない形で質問をした後、「Sくんはその、あれは軟式野球の(0.5) サークル入ってるからするのかな」(248行目)と質問の受け手をSに絞った形に変えて質問をする。軟式野球のサークルに入っているということは自動的にスポーツをする人と認識されるはずのため、これは誘導質問の形がとられているとも言える。そしてここで「スポーツをするような人」というのは、このグループの中では、フィットネスクラブに最も近い人という関係性が示されているように思える。このディスカッションでは、最終的に彼ら若者が持つフィットネスクラブのイメージを明らかにすることが目的となっていることを考えると、ここでこの質問にイエスと答えることは、フィットネスクラブについての何らかの意見を言うことが期待される人として自分自身を認める発話になりかねない。

250行目からのSの回答を追っていくと、まず「でも」と逆接を表す接続表現を利用して、直前のMの質問における「軟式野球のサークルに入っているから(スポーツ)をする」という前提に対して完全には合致しない回答を産出することを

予期させる。その後、「入ってるけど」と言って、サークルに入っていることを認めた上で、252-256 行目で「今回の、話にもある、何かフィットネスのあの、あんな感じのところには、行ったことはないから」と、フィットネスクラブとの関与を否定する。ここで一つ興味深いのは、248 行目の M の質問でも S の回答でもスポーツという言葉は使われておらず、M の質問はサークルに入っているかどうかを聞いているわけではなく、野球サークルに入っていることとスポーツをつなげているわけだが、S はサークルに言及することで、スポーツには触れず、M の質問で明言されていないフィットネスクラブへの言及を行なっている点だ。つまり、野球サークルに入っている人に属する“category relevant”な活動 (Psathas 1999) としてフィットネスクラブに行くこともあるということがこの 2 人の共通認識として表示されている。

また、発話の滑らかさがなくぎこちない点にも注意したい。前述のとおり「なんか」や「フィットネスの」、「あのあんな感じのところ」と不明瞭にすることで、フィットネスクラブには行ったこともないし、フィットネスクラブということばも使ったことがない、自分とは距離があることばなのだという表示になっているように聞こえる。そして M も「そういうジムとかには」(258 行目) とフィットネスクラブではなく、「ジム」という表現を使い、また「とかには」と曖昧さを付与し自分とも距離がある場所なのだという表示がされている。このようにして両者とも、フィットネスクラブについて知識がないことを示している。

次の断片 2 は上記の断片 1 の続きである。264 行目で S がジムに行ったことのある人はいないかと問いかけると N が経験がある旨を発言する (268 行目)。

[断片 2]

264. S: 逆に何かジムとか行ったことある人とかいないんですか?

265. (0.2)
 266. S: 中には
 267. M: 確かに ((I と T は左右に首を振る))
 268. N: フィットネスジム何回かだけ行ったことありますね
 269. ((みんなが「お!」という反応))
 270. (1.0)
 271. T: え、どういう、え、どういう時に行こうってなったの、それって
 272. (0.5)
 273. S: あの:(.) 従兄弟がいて:その従兄弟がちょっと体を鍛えたいって:ことで行ったんですけど (0.5) あんまピンとこなくて>行かなくなりました。

断片 1 の S の発話は、野球サークルに入っていることとフィットネスクラブの関係性への理解を示しつつも、フィットネスクラブの経験者、つまりもっと直接的にフィットネスクラブと関係のある人を探しているものとして理解できる。これまでの会話を追ってみると、コロナで外出が出来なくても余り不便を感じない、つまりフィットネスクラブからは距離感のあるゲーマーの人たちがいることがわかり、次に運動サークルに入っている人がいることがわかり、両者においてはフィットネスクラブにより近い存在であるのは、サークルに入っている人という図式が出来ている。このディスカッションの流れにおいて、次の話者になり得る人は、更に距離感のない直接的に経験したことのある人ということになる。つまりこの場で一番フィットネスクラブについて知っている人として期待される可能性がある。

そのような文脈の中、268 行目で N は「フィットネスジム何回かだけ行ったことありますね」と自分の経験を明かす。しかし、その発話は“だけ”という限定表現を使うことで、経験があることを認めてはいるものの自分の経験の少なさを強調し、豊富でないことを際立たせている。つまり豊富な経験があるということとしては語っておらず、フィットネスクラブについての自分の知識の度合いを引き下げているように見える。

前述のとおり、この場の会話の連鎖の中では、

行ったことがあると答えた瞬間に、状況としては経験者としてフィットネスクラブを知っている者のカテゴリに入ってしまい、経験者の立場からの発話が期待される。「逆になんか行ったことある人とかいないんですか」という質問も、行った人を探す質問であり、同時にその質問はYes/Noでの回答を求める単純な質問ではなく、次の展開として、経験について語り、何らかの意見を言うことが期待される質問である。実際、269行目、271行目の反応を見ると、行ったことがあるという発話だけでは済まされず、更なる語りが促されていることがわかる。そこまでのお膳立てがあるにもかかわらず、Nの発話は、その期待に沿わず、そのカテゴリに入った瞬間には、どうにかして出ようと抵抗しているように聞こえる。

詳しく見てみると、273行目のNの発話「あの：(.) 従兄弟がいて：その従兄弟がちょっと体を鍛えたいっつ：ことで行ったんですけど(0.5) あんまピンとこなくて行かなくなりました。」は、まず主体的に行ったわけではないことへの言及から始まる。あくまでも従兄弟の付き添いとして行ったという形にしている。そして全体的には丁寧語で話しているにもかかわらず、「っつ：こと」や「あんま」という丁寧語のレベルを下げ、ことばを短縮系で言っているのは、「>」で表される発話のスピードの速さともフィットしている。これにより自分の発話をより早く終えることが可能になっている。述語を「行かなくなりました」で縮め括ることにより、この発話での主情報としては、行ったことより行かなくなったことが強調されていると言える。

このようにNは、フィットネスクラブに行った経験を持つ者であることは明かすものの、それについて「知っている者」として自身の経験を語ったりはしていない。このことから、Nは、フィットネスクラブには合わない者として振る舞うことで、それに対する距離感を示していると言えよう。

4. まとめ

学生ディスカッションの中の2つの会話の断片からは、学生のフィットネスクラブに対するイメージとして、彼ら自身との距離感があらわになった。また、実際にフィットネスクラブに行った経験があっても、経験があることに対して志向せず、むしろフィットネスクラブからは距離感がある自分のイメージを表示していたことは興味深い。フィットネスクラブの若者会員を増やそうとするプロジェクトを始めるに当たり、プロジェクトを行う学生自身のフィットネスクラブに対するイメージがわかりやすくなったかもしれない。プロジェクトを、その当事者として主体的に進め、現実的な解決策を考える上で、現状ではフィットネスクラブに馴染みも知識もなく、むしろ距離感があることをアピールしている自分たちを認識することは重要である。単純に、若者である学生が若者視点で考えた課題解決策だから有効であるという偏見を捨て、まずは、そもそもここで言う若者とは誰なのかを見極めるべきである。その上で、ここで求められている若者像からは距離のある自分たちでも、フィットネスクラブの会員になりたいと思う解決策を考える難しさを学生が再認識できたなら、このような質的研究法を使った分析も役に立つのではないだろうか。今後は、データを増やし、更なる分析を進めていきたい。

—— 参考文献 ——

- Heritage, J. (1984) *Garfinkel and Ethnomethodology*, Polity Press
- Heritage, J., & Raymond, C. W. (2021) "Preference and polarity: Epistemic stance in question design", *Research on Language and Social Interaction*, 54(1), 39-59
- Psathas, G. (1999) "Studying the Organization in Action: Membership Categorization and Interaction Analysis", *Human Studies* 22: 139-162

The Students' Displays of the Image of Fitness-club

Mihoko FUKUSHIMA (Communication Laboratory)
Hyun-Jung KWON (Tsukuba University Part-time Lecturer)

Abstract

In this paper, by using conversation analysis, one of the qualitative research methodologies, we will analyze the students' discussions and the fragments of conversations in which they talk about fitness clubs. We will aim to clarify what kind of image the students have of fitness clubs. We pay attention to the conversation topics, their choice of words, and the ways in which they present themselves in the discussion of fitness club. Initially in the project, the students were naturally treated as the potential young members; however, the data revealed that the students were actually orienting themselves to the image of non-potential members of the fitness club.

This is a part of our project where the students were asked to find a solution to increase the young members at a fitness club. We conducted survey research with multiple methods, both quantitative and qualitative, at the fitness club where we collected data.